先進クラブから学ぶ、クラブ設立へのカギ

―クラブミーティング２００６（東地区）報告―

5 月 26、27 日の両日、「東地区」のクラブミーティングが、岸記念体育会館の講堂で行われた。「東地区」は全国 6 ブロック（北海道・東北、関東、北信越・東海、近畿、中国・四国、九州）のうち、「北海道・東北」と「関東」ブロックの各都道県から２２６名が集まり、研究協議を行った。

開会にあたり、日本体育協会生涯スポーツ推進専門委員会委員長の石川武常務理事と文部科学省生涯スポーツ課渡邊博善課長補佐より挨拶があり、その後、日本体育協会クラブ育成課根本光憲課長から「平成 18 年度総合型地域スポーツクラブ育成推進事業概要の説明」がなされた。

クラブミーティング２００６（東地区）スケジュール

1. 開会セレモニー
2. 総合型地域スポーツクラブ育成推進事業概要説明
3. 特別講演
   テーマ：クラブ創設に向けた取り組みについて
   演　者：小出利一（関東地方企画班員）
4. 情報交換・討議
   方　法：テーマ別グループミーティング
   コーディネーター：山本理人（北海道・東北地方企画班員）
5. 事例発表
   テーマ：総合型クラブ設立に向けた活動について
   演　者：矢部一（ほんまちクラブ／東京都渋谷区）
   演　者：林清美・佐藤淳子（泉クラブ／福島県いわき市）
   コーディネーター：作野誠一（関東地方企画班員）
6. 事業の事務処理説明

＊クラブ育成アドバイザーの役割
（対象：都道県クラブ育成アドバイザー）
演　者：進藤芳昭（山梨県体育協会クラブ育成アドバイザー）

特別講演「クラブ創設に向けた取り組みについて」

新町スポーツクラブ（群馬県高崎市）のクラブマネジャーでもある小出利一氏（関東地方企画班員）より、「この 10 年、たくさん失敗している。これを伝えるのが私の仕事」との切り出しで講演が始まった。

◆新町スポーツクラブＨＰ
http://www15.wind.ne.jp/~svc/

●日本におけるスポーツクラブの役割

変わってしまった日本社会を再生できる能力がクラブ組織にはある。大人と子供が触れ合う機会はクラブによって間違いなく増える。クラブは常に地域の子供が集まる場所となっている。

新町スポーツクラブでは、いろいろな団体が協力することで「なぎなた」というマイナースポーツを再生することができた。自分の地域独自の良い所を見つけ伝えていくのもスポーツクラブの役割である。

●創設する地域の魅力・人を探す

必要なのは、「地域」を冷静に見つめなおし、地域の魅力・人を最大限に活用して運営できるスポーツクラブを創設すること。スポーツも文化活動もあっていい。地域はいろいろな職業の素晴らしい人たちがいる。協力関係をもちながら組織をつくっていく。地域にどんな人がいるかはスポーツクラブ側ではわからないので行政が橋渡しをしてほしい。新町スポーツクラブでは人さがしに苦労した。

●創設時の悩みは関係者全員で共有

10 年前には困った時、聞くところがなく、総合型と少年団との違いもやりながら考えた。今は気軽に相談できる人が増え、クラブ内でも同じ方向を向いて一緒

に悩み、議論できる人が増え、精神的に楽になった。創設時は、中心人物だけにまかせっきりにならないような人員配置をすること、またネット上の情報も有効活用できる。

●地域にサポーターを増やす

スポーツクラブは創設地域の住民全体で共有する団体。地域企業・商店等にスポーツクラブの公益性を理解してもらう努力をする。パンフレットに「わたしたちは新町スポーツクラブを応援しています」と事業所名が入っているが、一軒ごとに伺い了解を得ている。このほか、ポスター掲載許可をもらっているところもある。この行動は慌てず地道に行うことが大切である。

●中心点をぶらさない

当初もらった創設助成金は「少年団を核に」が条件だった。まずは子供世代の多世代化をはかった。今も中心点は子供であり、中心点はぶらさない。「新町にいてよかった」と思うような、新町が大好きな子供達を育てることがミッションのポイントである。新町から広島に引っ越した青年が「新町の仲間と成人式をやりたい」と新町に帰ってきたこともあった。

●ドイツのスポーツクラブから学んだ運営

定期的にニュルンベルク市スポーツクラブと交流しているが運営面で学んでいる。「運営組織に様々な年齢層が入る」「行政と役割分担（施設整備は行政）をした連携」「青少年委員の存在を大切に」「地域の歴史を大切にし、子供から高齢者までしっかりと学習」「自分の地域を愛し、誇りをもっている」ことなどである。若い人を育て、ライン川みたいにゆっくり育てていきたい。

情報交換・討議

山本理人氏（北海道・東北地方企画班員）がコーディネーターを努め、６テーマ、24 グループに分かれて活発な討議が行われた。発表での主なコメントは以下である。

●クラブの理念・目的・・・地域の現状把握、いろいろな立場から課題を出し合って、クラブの理念ができあがっていくのではないか。

●人材の確保・・・運営スタッフが少なく、とくに若い人材の確保が共通の課題。楽しいクラブをつくる、飲み会を開くなど、様々な人を引き込んで継続していく。

テーマ別グループミーティング

テーマ１：クラブの理念・目的---------６グループ
テーマ２：人材の確保----------２グループ
テーマ３：活動拠点の確保----------２グループ
テーマ４：既存団体・組織等との連携---４グループ
テーマ５：クラブの事業----------５グループ
テーマ６：財源の確保----------５グループ

●活動拠点の確保・・・施設・ナイター不足、学校優先、既存団体の中に入り込む余地なし、など課題はあるが、行政に提案、学校長に望むなど最終的にはクラブの努力が必要である。

●既存団体・組織等との連携・・・協力してくれる人達を集める、長く続けられる団体と組む、など。10 年を目処に土日部活動の停止動向をにらんで、クラブ発展に向けての材料としたい。

●クラブの事業・・・年代に合うプログラムのあり方、運営委員会で話が進まないなど課題があるが、週１で中高一貫指導、子供のサッカーを応援にきた母親でママさんサッカーなどの試みがある。

●**財源の確保**・・・会費の設定、必要経費確保、スポンサー獲得、行政からの事業委託などの課題がある。スポーツの無料意識が強い中、クラブは経営感覚を養うことが必要。1 回ごとに指導料をもらうことで謝金が払える。企業施設の活用、商店街と割引契約なども考えられる。

事例発表「総合型クラブ設立に向けた活動について」

（コーディネーター：作野誠一氏；関東地方企画班）

●ほんまちクラブ（矢部一氏）　東京都渋谷区　　◆ＨＰ　http://www.shibu-hon.com/

渋谷区には 11 の地区体育会があり、そこを基盤にたちあげた。平成 14 年より取り組みを開始し平成 18 年 2 月に設立。始めは地域関係者 80 名もの組織だったため、組織づくりに時間がかかった。現在は、20 人ほどの運営委員が中心になって活動している。

苦労の連続で、参加者の気持ちを一つにするのが大変だった。会費設定を数字からはじき出しても、「年間 1 万円は高い」という声が委員からでてきた。クラブの目標や名前を決めるのにも 1 年かかったが、会費の設定・決着には一番時間がかかった。5 月現在の種別と会員数は、「クラブ会員（年会費 1 万円、参加費無料）54 名」「一般会員（年会費 2 千円、参加費 1 回 300 円）42 名」「U18 会員（年会費千円、参加費 1 回 100 円）80 名」で、年 1 万円でも会員が来ている。年度途中の入会や、種別間での移行の際にどうするかを検討中である。

クラブハウスは、学校体育館の地下の物置を使っている。改装や電話などは区がやってくれた。運営委員会は月 1 回である。いつも電話に出られる人がいないので、留守電、ＦＡＸ、メールで対応している。

プログラムの特徴は、「コース化」である。教室ごとに募集しても人が集まらないので教室を複数束ねてコース化した。「リラクゼーションコース（ヨガ、フラダンス）」「カルチャーコース（パソコン、話し方、木目込みクラフト、料理、フラワーアレンジメント）」「キッズコース（スポーツ苦手克服、スポーツチャレンジ）」「スポレクコース（硬式テニス、バドミントン、ウォーキング、エアロビクス、軽スポーツ）」である。1 コース 20 人が損益分岐点である。パソコン教室は人気があり、倍増予定。キッズコースの「スポーツ苦手克服」には幼児がたくさん来ているが、参加者が増えるほど赤字であり、助手がいないとまわらないなどの悩みがある。

現在、広報は町会の掲示板を使っているが不足を感じている。現在のプログラム・メニューで何人の会員が適当なのか、またスタッフ確保も課題である。

●泉クラブ（林清美、佐藤淳子）　福島県いわき市

地区人口 1 万 8 千人、もともと文化・スポーツ活動が活発な土地柄で、既存団体に理解してもらいにくかった。総合型クラブは説明しても目に見えないので難しい。平成 16 年 11 月より創設準備、平成 18 年 2 月設立。設立後は活動を通して理解してもらうように考えている。

会長以外、スタッフは「ほとんど女性」というめずらしいクラブである。会長の坂本氏は、体指会長、体協事務局長など 30 年も携わってきた。10 年前から総合型クラブの失敗・成功事例を研究し構想を練り上げていた。陸上の少年団を核としてクラブや親を巻き込んでいくこととした。設立総会では、地元出身の実績あるランナーに長く楽しむスポーツを中心に講演して

もらった。指導者は市内トップクラスの人達を集めた。
　プログラムの「浜っ子運動教室」「トランポリン体操教室」は運動していない子供の参加をねらった。見学の保護者（親・祖父母）をも巻き込んだ「ボール遊び」「アロマストレッチ」なども行った。会員以外も参加できる「交流大会」を種目ごと年に１回程度開催している。これにより、クラブの認知度を上げ、新規会員獲得をめざしている。交流大会は、陸上、グランドゴルフ、バドミントン、テニス、ゴルフなどの教室種目に連動した大会。小学生 80 名の参加があった「陸上スポーツ交流大会」は新聞社 4 社から取材があった。マスコミには、写真なども付けた投げ込みを行っている。
　自主運営への展望として、会員増加による安定財源が理想だが、時間がかかると思われる。各教室参加費は月 1,500 円位であり、会員は年会費を払うことに躊躇しているようだ。賛助会員（自分は参加しないが活動を盛り上げたい人）は１口５千円、年間 100 万円を目標に拡大をねらっている。中学生が小学生を世話するマラソンイベントなども行っている。楽しむスポーツと極めるスポーツの両立をはかって、泉クラブでは、楽しくスポーツを続けていけるような場にしたい。

　以上、事例発表の後、質疑応答を行った。「年・月会費を簡便に集める方法」「若手の活用、若い人の参加をどうするか」「キッズスポーツと少年団の関係」などが寄せられた。最後にコーディネーターの作野氏より、「事例報告では結果に目が行きがちだが、それを決めたプロセスや会議の仕方が大事。何をしたいか、目標がしっかりしないと熱い議論はできない」とのコメントで締めくくられた。

　この後、日本体育協会クラブ育成課金谷主事が、委託事業の事務処理等を説明し、継続と新規クラブが混在する中で、昨年度と変更になったことを含め、事務処理方法について説明した。
　説明の後、黒須充氏（中央企画班長・北海道・東北地方企画班長）より、ドイツより来日されていたドイツスポーツユーゲント副本部長のギュンター・フランツェン氏の紹介があり、ギュンター氏よりドイツのスポーツクラブの現状についての説明があった。
　その後、都道県体育協会担当者とクラブ育成アドバイザーを対象に、クラブ育成アドバイザーの役割をテーマに、山梨県体育協会クラブ育成アドバイザー進藤芳昭氏が、自らが活動してきた内容や体験したことを報告し、全日程を終了した。

（報告：関東ブロック地方企画班長　松澤　淳子）